

共感性と日本語の“思いやり”の意味の相違点とその測定

長尾 博

The differences of meaning of words between empathy and Japanese “*omoiyari*” and measurements of “*omoiyari*”

Hiroshi Nagao

[Abstracts]

The purpose of this study was to investigate the traits and the measurement concerning meaning of Japanese “*omoiyari*”. The reason of this study was evidence that there were many differences of meaning between Japan and western countries regarding empathy in five fields of psychology.

First, the definitions and its change concerning empathy, various meaning of empathy in foreign nations, and view points of empathy by various schools of psychotherapy were summarized. Consequently, many meaning concerning empathy and the depth of empathy from unconscious to conscious were found out. Secondly taking these results into consideration, the origin of a word of “*omoiyari*”, the definitions of “*omoiyari*”, and its change were summarized. As a result, the traits of “*omoiyari*” implicated the meaning of fast and deeply sympathizing with others’ emotion through nonverbal communication.

At last the author proposed to develop questionnaire method of “*omoiyari*” and to measure movement of nervous cells in brain as regards “*omoiyari*” by means of MSEG on the basis of bottom-up and top down information processing theory.

キー・ワード：思いやり、共感性、測定、ボトムアップ-トップダウン情報処理過程理論、異文化研究

Keywords; *omoiyari*, empathy, measurement, bottom-up and top-down information processing theory, cross-cultural research

1. はじめに

本稿は、古くから日常で用いられている日本語の“思いやり”という意味の特徴についてこの語の歴史の変遷と心理学における共感性 (empathy) の概念との相違点をもとに明らかにし、どのようにして“思いやり”の程度を測定していくかを提案するものである。

わが国の国民性は、集団での人間関係を重視し、しかも親しい他者には怒りや悲しみなどの負の感情を表現する深い結びつきに価値を置いている特徴があるといわれている。このことは、足立 (1993) が15歳から大学生までの460名の日本人と、同じく15歳から大学生までの192名のアメリカ人を対象に6種類の心理テストを実施した結果から、日本人の場合、集団から逸脱することを最も恐れること、また、栗山・大井 (2012) による大学生の価値観についての調査で人間関係を最も重視していることや、Yogoと尾上 (1998) の調査で、怒りや悲しみなど負のライフイベントから生

じる感情¹⁾を約80%以上の人々が他者へ自己開示していることからわかる。

Lebra (1976) は、とくに日本語の“思いやり”という語は、人間関係における日本文化の特徴の1つを示していると指摘している。

ヒトの思想は、とくにことばによって表現され (大野, 1974)、このことばの意味は、文化の影響が強いといわれている (鈴木, 1973)。心理学では、一般に他者の認知や感情を理解することを共感性という。しかし、この共感 (共感性) という語について日本文化という観点をふまえると土居 (1992) によれば、共感 (共感性) という語は、元来、外来語から造成された術語であり、わが国では、まだこの語はすっかり同化されていない点が指摘されている。たとえば、長尾 (2014) による2014年11月に実施した女子大学生4年生102名を対象とした「あなたは、共感と“思いやり”の2つの語のうちでどちらを日常でよく用いますか」についての二者択一の調査結果では、73名 (72%) の学生が古くからある日本語の“思いやり”という語をよく用いると答えている。

そこで本稿では、(1) 共感性に関するわが国の研究結果と欧米の研究結果との相違をとらえて“思いやり”という語の特徴を解明していく根拠をあげ、(2) 共感性の定義についてその歴史の変遷や諸外国では共感性という語をどのようにとらえているか、また、各種心理療法 (psychotherapy) 学派の共感性のとらえ方の違いを明らかにし、共感性という語の定義の多様性や共感性を意識水準から無意識水準までとらえる深さについて明らかにし、(3) 最後に日本語の“思いやり”という語の特徴について、(2) の結果を参考にこの語の歴史の変遷をもとにして解明し、“思いやり”の測定法も提案することにした。

2. 共感性研究の結果の文化差

発達心理学、認知心理学、社会心理学、パーソナリティ心理学、臨床心理学の各分野において共感性についてのわが国と欧米の主な研究を紹介し、本稿で“思いやり”という語の特徴を明らかにしていく根拠をあげたい。

まず、発達心理学の分野では、日本文化をふまえた乳幼児期の共感性研究について、従来からわが国の母子密着文化が指摘されており (Nakagawa, Teti, & Lamb, 1992)、とくに風間ら (2013) による4歳児を対象とした日米の母親の養育態度と子どものもつ共感性との関係についての比較研究から、アメリカの場合、双方に相関はなかったが、わが国の場合、母親のあいまいな養育態度と子どものもつ共感性とは負の相関が示されている。このことから、Hoffman (1963) が母親の一貫した受容的態度が子どもの共感性を生じさせることを実証していることをふまえ、母子密着度の強いわが国の母子関係において、一定しないあいまいな母親の養育態度は、子どもの共感性の発達に悪い影響を与えていることがとらえられる。

また、共感性の認知的側面の発達に関して、唐澤 (2015) が、Premack and Woodruff (1978) の心の理論 (the theory of mind) にもとづいて就学前のわが国とアメリカ、中国の子どもを対象にWellman et al. (2001) の創案した誤信念判断課題 (content false belief) を実施した結果では、わが国の子どもの共感性の認知的側面の発達の遅れが明らかにされている。この結果から、唐澤 (2015) は、認知的側面とともに共感性の感情的側面の発達についての文化差をとらえることの必要性を唱えている。

また、社会心理学の分野において、Davis (1994) は共感性は攻撃性を抑制させる効果があることを示している。Crick and Grotpeter (1995) は、否定的なうわさをしたり、他者を排除する攻撃性を関係性攻撃 (relational aggression) と呼び、この関係性攻撃と共感性との関連についてのわが国の研究では、幼児期と学童期とで結果が異なっている。幼児期では、日米とも双方には正の相関があるが (島山・島山, 2012; 磯部・佐藤, 2003; Feshbach and Feshbach, 1969; Crick and Grotpeter, 1995)、学童期においては、アメリカでは双方には正の相関があるものの (Arsenio and Lemerise, 2001)、わが国では双方に負の相関が示されている (勝間・山崎, 2008)。

この結果の相違は、日米の学童期における攻撃性の強さの違いからくる交友関係のあり方の特徴の差から生じているのか、それとも日本の学校文化の特徴である「ウチ」の人か「ソト」の人かの区分をして自分たちの集団に属する者だけ共感性を示すこと（菊池，1984）から生じているのかを今後、明らかにしていく必要があると思われる。

次にパーソナリティ心理学においては、共感性と自己愛（narcissism）との関係について、アメリカのWatson et al. (1984) は共感性と自己愛とに有意な負の相関があることを示しているが、わが国の大石（1989）の研究では双方の強い相関がないことが示されている。角田（1998）は、この違いを測定に用いた尺度の違いからではないかととらえている。今後、同じ尺度を用いて日米間の比較を行う必要があるが、筆者は、Markus and Kitayama（1991）のいうわが国の国民の特性である相互依存的対人関係という文化的要因もこの結果の違いの原因ではないかととらえている。つまり、日本人は相互依存的対人関係という和を重視することから他者を“思いやり”、自己中心ではない一方、アメリカ人は相互独立的自己を重視することから共感性と自己愛は負の相関を示しているのではないかと考える。

最後に臨床心理学においては、日本語という観点では、土居（1971）が、日本人のクライアントがもつ“甘え”を指摘し、鱸（1985）は、“思いやり”は心の成熟が、一方、“甘え”は心の未熟さが特徴であると述べ、治療者はクライアントの病的破壊的な力に屈しない強靱な“思いやり”をもつ必要があることをあげている。また、下山（1993）は、心理療法の過程で一般に治療者は共感したことをその都度ことばで確認するが、わが国では、治療者によることばによる共感性は、クライアントにとってはある面では脅かすこともあり、非言語的な共感性の重要性をあげている。

このような5分野の共感性に関する研究でのわが国と欧米との結果の相違があることから筆者は、“思いやり”についての特徴とその歴史について明らかにしていく必要があるととらえた。

3-1. 共感性の定義と諸外国の共感性のとらえ方

日本語の“思いやり”の特徴についてふれる前に共感性の定義の歴史的変遷と諸外国では共感性についてどのようにとらえているか、また、共感性の深さという視点をとらえるために各種心理療法学派の共感性についての見解を述べたい。

共感性に類似する語は、古くからあり、たとえばSmith（1759）やLipps（1899）などの経済学者や哲学者によるものから始まっている。Smith（1759）は、sympathyという語を用い、Lipps（1899）は、ドイツ語のEinfühlungをempathyという語に訳している。

表1に20世紀から今日までの主な共感性の定義をまとめた。

表1からHoffman（1975）による定義までは主に感情的側面の共感が中心であったが、Davis（1983）による定義からその意味は多面的となり、Batson et al.（1997）の定義では、自己注視と他者注視とに分けた視点となり、Barron-Cohen and Wheelwright（2004）の定義では、認知と感情とに分けた共感性をとらえ、Decety and Jackson（2004）の定義では、脳内のメカニズムを根拠にした認知神経科学からの視点がみられ、さらにTran et al.（2013）は、認知と感情、日常生活と想像上の生活の4つで構成される共感性尺度を作成し、その因子分析の結果から、(1) 感受性（sensitivity）と(2) 他者との関係や関心をもつこと（concern）との2因子を抽出している。

次に英語圏以外の諸外国の共感性という語がもつ意味の特徴を表2にまとめた。

表2より、共感性という語がもつ感情的な側面については、中国語、スペイン語、ギリシア語のように伝統のある国がその傾向が強く、認知的な側面については、ドイツ語や韓国語がその傾向が強いことがわかる。また、共感性という語がもつ深さという側面については、自分の意見や考えを抑え、相手との関係を築くことを重視する意味をもつフランス語がその傾向が強いことがわかる。

このように共感性の定義は、時代とともに変化、展開し、また、その国によって共感性という語がもつ意味は異なっていることがわかる。

表1 20世紀から今日までの主な共感性の定義の変遷

年	提唱者	定義
1949	Dymond	他者の内面の中に自分自身を想像的に置き換える能力
1969	Stoland	他者の情動経験に対する観察者の情動反応
1975	Hoffman	自分自身よりも他者に対する適切な感情反応
1983	Davis	共感的関心、個人的苦痛、想像性、視点取得の4点からなるもの
1997	Batson et al.	他者の状態を推理する「他者注視的認知過程」と自分と他者とを関連させた情報を用いる「自己注視的認知過程」との2つがある
2004	Baron-Cohen & Wheelwright	(1)他者の悩みを緩和させたい(同情 sympathy), (2)他者の感情をみてひき起こされる(感情的共感), (3)他者が感じている、考えていることを推測する(認知的共感)
2004	Decety & Jackson	(1)神経生理上の共通の表現様式、(2)自己知覚(self-awareness)、(3)心の柔軟性(イメージの豊かさ)、(4)情緒の統制力の4つの要因からなる
2005	Blair	(1)心の理論にもとづく認知的共感、(2)動作の他者から取り入れ、(3)表情と発言からの感情的共感の3つの要因からなる
2013	Tran et al.	主に(1)感受性(sensitivity)と(2)他者と関係をもつ(concern)とで構成されている

表2 諸外国の共感性という語がもつ意味の特徴(ネーミング辞典, 2012)

国名	共感性の訳語	意味の特徴
中国	トンクンク	同情(sympathy)という意味に近い
韓国	コンガムハダ	(1)推測する (2)賛成するという意味
フランス	Empathie	(1)関係づけ(rapport)と (2)自分の意見や考えを抑える(atténuer)の意味
ドイツ	Empathie	相手の話に賛同、感銘するという意味
スペイン	Empatia	相手に親愛感をもつという意味
ギリシア	シンパティア	

3-2. 共感性と関連する用語

最近の認知神経科学分野の共感性研究では、とくに不治の病や障害者へのケアに関して知恵 (wisdom)、つまり向社会行動、社会的な判断、生きることの実践的知識、相対的価値観、あいまいなことへの効果的な対応を重視すること (Meeks et al. 2009) や、あわれみ (compassion)、つまり苦しんでいる人へ手を差し延べたい感情や少しでも救済したい動機づけをもつこと (Halifax, 2012) の2要因が強調されている。Halifax (2012) は、これらの知恵やあわれみが基本となり、図1に示すとくに感情面の共感性などの多くの要因をふまえて苦しんでいる人や困っている人への支援ができるととらえている。

Olnick (1984) は、共感性と同情との厳密な区分はできないことを指摘している。とくに医療現場においては、医療スタッフが患者のもつ苦しみを共感するのか、それとも同情するのかについての実践上の定義の区分が難しく (Mathiasen, 2006)、また、医療スタッフや医師研修生が患者のもつ身体的痛みなどの症状をどの程度共感できるかの研究に関しても、必ずしも患者の身体的な苦しみを正しく共感できているとは限らないという結果が多い (Kathy et al. 2006; Hemmerdinger et al. 2007)。

また、Barron-Cohen and Weelwright (2004) の自閉症を対象とした研究から共感性の認知的側面と感情的側面の区分がある程度明確になってきたものの、Tran et al. (2013) の18歳から67歳までの一般市民を対象とした共感性の研究では認知的側面と感情的側面の区分も容易ではないことが示されている。

このような研究結果から共感性に関連する語についてまとめると、共感性と同情やあわれみなどの語の意味の明確な区分や感情的共感性と認知的共感性との区分も容易ではないことが示唆された。

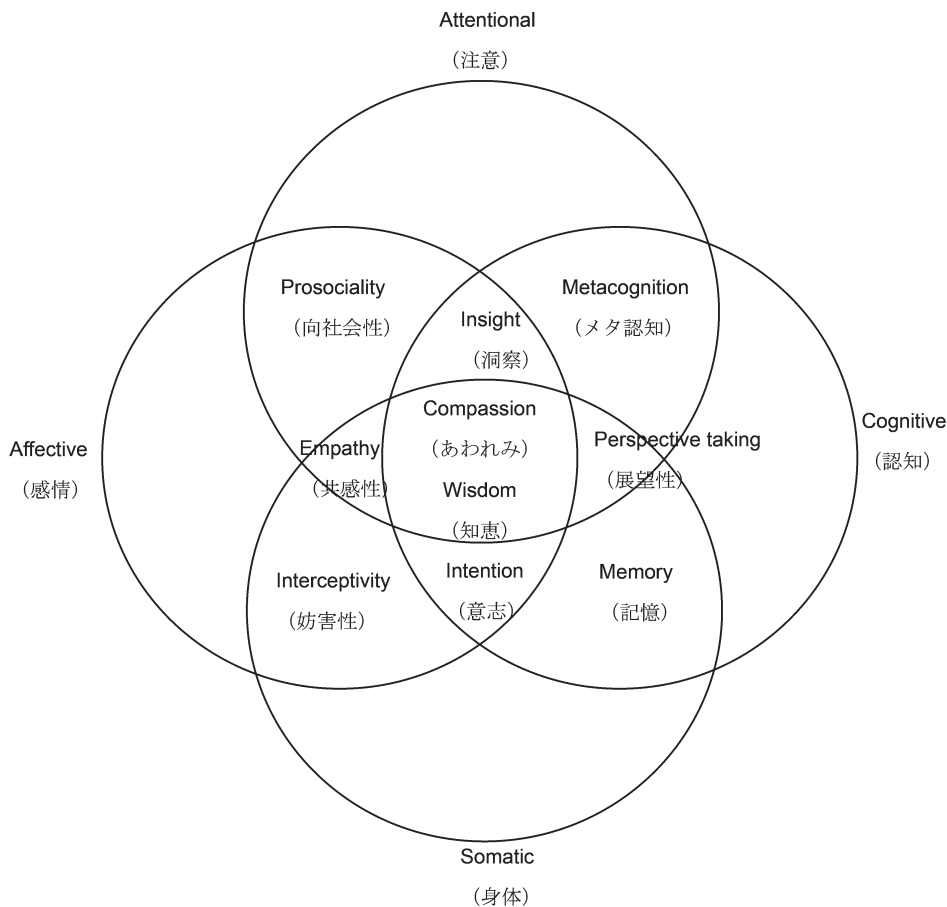


図1 Halifaxの苦しむ他者への自発的な支援モデル (Halifax, 2012)

3-3. 共感性の深さと各種心理療法

最近の心理療法に関してどの学派も治療者の共感性を重視している。

河合（1992）は、共感性は臨床家のもつ武器であるといい、また、Chessick（1992）は、共感性は心理療法における本質であるとして重視している。

以下に心理療法学派別に共感性のとらえ方の動向についてふれたい。クライエント中心療法学派では、Rogers（1957）がパーソナリティ変化の必要十分条件の1つとして治療者の共感的態度をあげて重視し、この共感性についても（1）治療者によるクライエントへの共感度、（2）共感的（感情的）な関係の深まり、（3）クライエントの知覚された治療者からの共感度の3種類がとらえられ、田中（2006）は、この3種類は同一の治療過程においてそれぞれの共感性の程度が異なることを明らかにしている。

一方、精神分析療法学派における共感性については、創始者Freud（1921）は、集団におけるヒトの共感性を強調したが、心理療法における共感性についてはとくに大きく取りあげてはいない。それは、この療法の治療目標が、現実吟味能力の育成と無意識的本能欲求を越えた理性的な自我（私）の形成であり、感情的側面よりもむしろ認知的側面を重視し、治療者（他者）とのへだたりからクライエントの自我（私）をつくるという特徴があるからであろう。

しかし、洞察療法の行き詰まりから1970年以降の精神分析療法学派は、Kohutの自己心理学派やSternを代表とする間主観性論学派によって治療者の共感性が重視され始めた。

とくにFonagy et al.（1997）は、メンタライゼーション（mentalization）という治療関係を通してクライエントの心を共感するという意味をもつ語を提示している。

一方、行動療法学派においても山上（1984）は、治療関係が重要であることを指摘し、認知行動療法の先駆者Beck（1970）も治療関係を重視しており、また、この学派は、昨今、関係フレーム理論（relational frame theory, Hayes, Barnes-Holmes, & Roche, 2001）というヒトの多くの苦痛に関する認知的な原因を探究する行動理論を提唱している。

このように最近では、クライエント中心療法学派以外の精神分析療法学派や行動療法学派においても治療者の共感性が重視されている。

そこで、図2に各種心理療法学派において心と行動のどの部分、どの水準を共感しているのかについてまとめてみた。

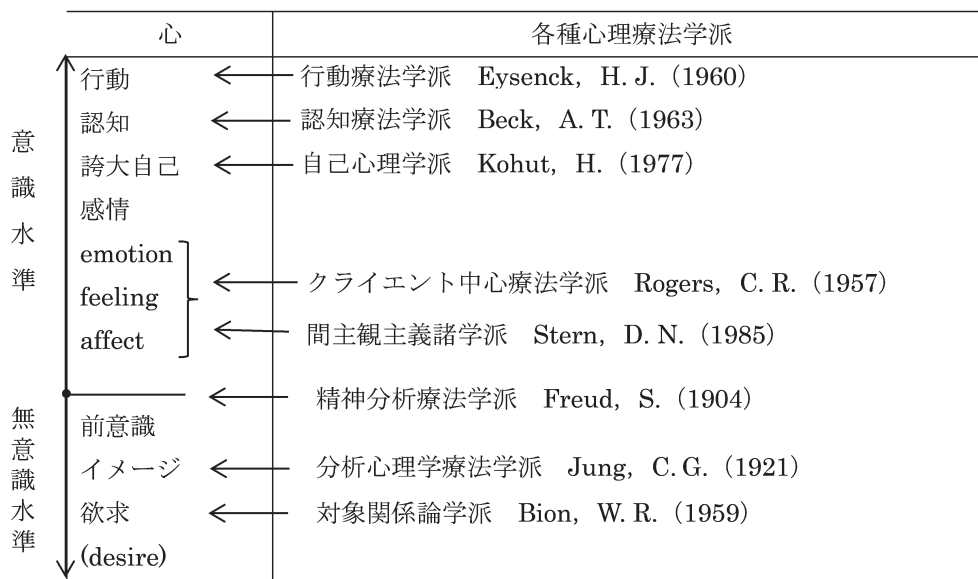


図2 各種心理療法学派別の共感性の水準（長尾，2013を修正）

図2の各種心理療法学派の共感性についてを概説すると、Kohut (1977) の自己心理学では、ヒトは自分を認めて欲しい欲求や理想や指導者になりたい願望が強いととらえ、このことを治療者が共感、解釈 (interpretation) することによって、向上していく中核自己 (nuclear self) が形成される変容性内在化 (transmuting internalization) が生じると仮定している。また、Rogers (1957) は、治療者がクライアントの感情的側面の共感的理解 (empathic understanding) をすることによって共感的な関係 (empathic concern) が生じてクライアントのパーソナリティが変化するととらえている。また、Stern (1985) らの間主観主義学派では、治療者の感性 (sensitivity) を通してクライアントの話すコンテクスト (context) を重視し、情動調律 (affect attunement) という他者の情動との共有や調整を行い、それを言語化して自己と他者との区分ができるととらえている。また、Jung (1921) の分析心理学療法では、治療者の直観 (intuition) を通してクライアントの無意識世界の内容を象徴化したイメージ (image) にして表現させることによって本当の自己 (self) が実現化していくととらえている。

また、Sternのいう感性とJungのいう直観との違いは、感性は、他者の情動 (affect) を鋭く感じとることをいい、直観は、見たもの (顔、姿、作品) を鋭くイメージとして感じとり、クライアントのその後の心の変化を予測をしていくことをいう。

さらにBion (1959) の対象関係論学派では、母親が乳児の不安・不快感を夢想 (reverie) して包みこみ (contain)、連結 (linking) する態度を強調し、クライアントのもつことばに表わせない不安・不快な感じを β 要素とし、治療者がクライアントの β 要素を包みこむことによってクライアントのもつよいイメージに変換できる α 機能を活性化させて、心の中の意識水準内容と無意識水準内容との区分や現実と内的世界との区分ができる接触障壁膜 (contact barrier) が強化されるととらえている。とくにJungもBionもクライアントの見た夢内容を治療に用いることが多い。

これまで共感性について述べたことをまとめると共感性の定義についての多義性や共感性について深さがあることが明らかになった。

4-1. “思いやり”の語源とこの語の歴史の変遷

共感性に関する定義やその歴史の変遷、諸外国の共感性という語の意味、及び各種心理療法の見解をもとにした共感性の深さについて述べてきたが、以下に共感性と日本語の“思いやり”という語はどのような点が異なるかについて“思いやり”の語源とこの語の歴史の変遷からふれていきたい。

日本語源広辞典 (2010) によれば“思いやり”という語は、「思う」または「念う」という語の連用形と「遣る」との連語であり、この「思う」の語源は、中国語の「思」、つまり心の機能という意味がある。その後、「思う」は、(1) 相手のオモ (顔) を自分の心に描き続けるという意味と、(2) 重う、つまり気分が重くなるという意味の2つになったという。また、「遣る」とは、遠くへ自分の身を送るという意味があるという。このようなことから“思いやり”の当初の意味は、「自分の心を相手に移す」という意味があったととらえられる。また、日本百科大辞典 (1988) によれば、“思いやり”という語は、日本文化の背景にあるヒトとの「和」を重視する「気配り」、「心遣い」、「気の毒に思う」という語がふくまれているという。

では、“思いやり”という語は、歴史的にどのように変遷してきたのであろうか。

表3にわが国における平安から鎌倉時代にかけての“思いやり”という語の意味の歴史の変遷をまとめた。

表3 “思いやり” という語の歴史の変遷

時代	語源と意味	例文	典拠
900 年代	いたわしい (かわいそう・気の毒)	かの内侍のかみのを父母 のかなしがる人にて限り なりくいたわしうまたな きものに思ひ	宇津保物語 三苦 (1976) を参照
	やさし (情け深さ)	宿を貸しぬるこそやさし けれ	義経記 西津 (2004) を参照
1000 年代	やさし (配慮のある)	御心ざまわづらはしくく せぐせし人、あまりやさし きことありな	大鏡 佐藤 (1927) を参照
1200 年代	やさし (ことば以外で察する)	基政という笛の師、かうぶ り賜れる、よろこびいひに おはしたりけるこそ、いと やさし侍けれ	今鏡 海野 (1996) を参照

阪倉 (1978) によれば、“思いやり” という語は、気の毒に思うという意味の「いたわしい」(かわいそう) という語から始まり、平安時代から鎌倉時代を経て竹内 (1997) によれば、「やさし」という語が、“思いやり” という語と同義語になっていったという。この「やさし」、つまり「やさしい」という語の語源は、「自分の身が痩せ細るように恥ずかしい」という意味があり、慎み深さを重視した語に由来している (日本語源広辞典, 2010)。竹内 (1997) によれば、この「やさし」という語は、「義経記」では感情面の共感の意味に変化し、「大鏡」では、他者への「思慮深さ」を意味し、最後に「今鏡」では、言語以外で他者の心を「察する」という意味をもつようになってきたという。Travis (1998) は、この「察する」という語は、日本文化論の中で非言語的に他者の心を共感するという意味をもつものと指摘している。

4-2. “思いやり” の定義とその特徴

現代では“思いやり” という語はどのように定義づけられているのであろうか。

表4は、広辞苑 (1955) とライトハウス和英辞典 (1984) をもとにした“思いやり” という語の定義を示したものである。

表4 “思いやり” の定義と英訳

“思いやり” の意味 (広辞苑,1955)	“思いやり” の英訳 (ライトハウス和英辞典,1984)
①思いをはせる (走らせる)	⑤consideration (文語的)
②推量する	他者の感情、立場などを思慮深く思いはか ること
③同情する	⑥sympathy
④心配である	苦しんでいる人への同情
	⑦pity
	自分よりも下の者へのあわれみ

表3に示した“思いやり”という語の歴史的変遷と表4に示した現代の“思いやり”の定義と英訳をもとに筆者は、“思いやり”という語がもつ特徴は、次の4点があるにとらえた。

(1) 他者の心を「早く」察すること。このことは表4の①の「思いを走らせる」という意味や表3の「今鏡」に表現された「やさし」(察する)という意味からとらえられる。また、「早く察する」という意味は、Jung (1921) のいう直観と相通じる点があると思われる。

(2) 感情的側面の同情をふくむ。このことは表4の③の「同情する」からとらえられ、この点は、表2に示した中国語やスペイン語、ギリシア語の共感性の意味と同様に古い歴史のある国の特徴ではないかと思われる。また、“思いやり”という語は、感情的側面のうちで表3に示す「いたわしい」、「気の毒である」という感情から発した語であることから、とくに図1に示すcompassion(あわれみ)を中心とした左側の円の感情内容と相通じる点があると思われる。

(3) 他者の心を「深く」とらえるという意味をもつ。これは、表1の英訳の⑤のconsiderationからとらえられ、この点は、Bion (1959) のいう相手の心を夢想して包み込むことに相通じる点があると思われる。

(4) 非言語的交流から相手の心を「察する」ことを意味する。これは、表4の②の「推量する」や表3の「今鏡」での「やさし」という語からとらえられ、この点は、Jung (1921) のいう直観やStern (1985) のいう治療者のもつ感性(sensitivity)と相通じる点があると思われる。また、表1のBlair (2005) の共感性の定義のうちの「動作の取り入れ」は、“思いやり”という語がもつ「察する」と関連があるのではないかと思われる。

では、“思いやり”という語がもつ特徴である他者の心について、(1) 早く、(2) 感情的側面を、(3) 深く、(4) 非言語的に察することの4点はどのようにして測定できるのであろうか。

5-1. 共感性の測定

共感性の測定に関しては、(1) 認知神経科学ではf-MRI(機能的磁気共鳴画像法)、GSR(電気性皮膚反射法)、MEG(磁気脳髄画像法)、脳波などの測定法があり、(2) 心理学では、主にアニメーションを用いた視線研究(Dadds et al. 2012)、面接法(Mathiasen, 2006)、顔の表情を提示して感情を推測させる方法(Keltner and Shiota, 2003)、異文化研究でのビデオを用いた多面的な音声の分析法(Tobin et al, 1989)及び質問紙法がある。

共感性の代表的な質問紙法としては、青年期・成人用では、Mehrabian and Epstein (1972) のQMEE(questionnaire measure of emotional empathy; 加藤・高木訳1980)やDavis (1983) のIRI(interpersonal reactivity index; 櫻井訳1988)、鈴木・木野(2008)の多次元共感性尺度、角田(1994)の共有経験・共有不全経験を軸とした共感経験尺度改訂版があり、臨床心理学では、感情的側面中心のBarret-Lennard(1962)の共感性尺度がよく使われている。また、医療領域では身体的苦痛についての共感性尺度としてJefferson尺度(Hojet et al. 2001)がある。また、児童期では、Reid et al. (2013)によるKEDS(the kids' empathic developmental scale)がある。

5-2. “思いやり”の測定

以上のことから“思いやり”について測定するためには異文化比較研究が必要であろう。とくに調査対象の暦年齢として箕浦(1984)が発達と異文化の関わり合いが大きく変化する年齢として9歳から15歳までという知見をあげていることから小学生から中学生までが研究対象として最もふさわしいと思われる。また、菊池(1984)による日本人の「ウチ」と「ソト」、内集団と外集団との使い分けという特徴をふまえ、日本人の“思いやり”の程度について内集団と外集団の比較研究も必要であろう。

以下に“思いやり”の質問紙法と認知神経科学にもとづくMEGを用いた測定法について述べる。

(1) 質問紙法

質問紙法の“思いやり”尺度として、(内田・北山, 2001)があり、彼らのいう“思いやり”の特徴として、(1)感情中心の共感性、(2)向社会的行動への動機づけ、(3)“察する”という直観の3点があげられている。この尺度は、大学生を対象として5件法で作成され、22項目からなり、クロンバックの信頼性係数は、.84と高く、感情的共感性は、QMEEの得点との相関係数から妥当性が検証され、相互協調性は、Singelis (1994)の相互独立性・相互協調性尺度の得点との相関係数から妥当性が検証されている。この結果から彼らは、“思いやり”を相互協調的同情(interpersonal sympathy)ととらえている。しかし、内田・北山の尺度には、感情的共感性をとらえる質問項目はあるものの既述した筆者があげた“思いやり”の意味の特徴である(1)「早く」他者の心をつかむ、(2)「深く」他者の心をつかむ、(3)非言語的に他者の心を「察する」という点をとらえる質問項目はない。

この3点の特徴をとらえる質問項目を内田・北山(2001)の尺度に加えていくか、それとも既述した筆者のいう“思いやり”の4点の特徴をとらえる質問紙法尺度を新たに作成するかが今後の課題となる。また、直観的に他者の心をとらえる程度をみるためには質問紙法よりも投影法のP-Fスタディテストのようにある場面を想定して、「あなたなら相手の心をどのようにとらえるか」をみていくテストの作成を工夫していくことも必要であろう。

(2) ボトムアップ・トップダウン情報処理過程理論(bottom-up and top-down information processing theory)の紹介とMEGによる“思いやり”の測定

昨今の共感性の研究においては、脳の多様な機能を探求する認知神経科学の進歩はめざましいものがある(Decety, 2012; Rosenblum, 2010; Ward, 2012など)。

そこで認知神経科学でのDecety and Meyer (2008)のボトムアップ・トップダウン情報処理過程理論を筆者なりに解釈したものを紹介し、この理論にもとづいて電磁波によって時間経過による神経細胞の動きが測定できるMEGなどを用いて他者の心の内容を受けとめる「早さ」(速度)を測定したり、他者がことばで表現しなくても非言語的に表現した内容を脳内ではどのように反応して受けとめているかをみていく方法を提案したい。

Decety and Jackson (2004)は、Darwin (1872)のいうヒトや類人猿は、種の保存のために本能的に他者へ表現する共通の表現様式を有するという仮説をf-MRIを用いて実証し、これを共有の表現様式(shared neural representation)と名づけている。彼らは、表1に示したように共感性は、脳内で(1)この共有の表現様式と(2)自己と他者との区分ができる自己覚知、そして(3)他者の心を推測する心の柔軟性、(4)自分の感じたものをどの程度他者へ伝えるかのコントロールという4つの要因で構成されているととらえ、これら4つの要因の力動的メカニズムを図3に示すボトムアップ・トップダウン情報処理過程理論として提唱している。筆者なりのこの理論の解釈は、図3の②に示すように他者との交流の中で自己の心の中において個人的で生育史上形成された意識せずして生ずる自動的な「動作」や「感情」についてを意識して(ボトムアップ)、図3の③に示すようにその内容を他者との交流上の文脈や出会った状況に応じて判断・調整・コントロールしながら他者の認知をとらえ、さらにその内容を自己の選択的注意や自己調整を通して自己の無意識世界へフィードバックする(トップダウン)というものである。このようなメタ認知的フィードバックが、他者の「感情」への反応のあり方に決定的な役割を果たすというものである。脳の部位では、図3の②は上側頭溝と前頭前皮質の内側が中心に働いており(Zaki et al. 2009)、図3の③は、中帯状皮質の前部と島皮質の前部が中心に働いていることがわかっている(Danzinger et al. 2009)。

既述したように唐澤(2015)による就学前の子どもを対象とした異文化研究の結果では、わが国の子どもの場合、共感性の認知的側面の発達が遅いことが示されていることから、今後は筆者がとらえた“思いやり”という語がもつ特徴をふまえて、とくに感情的側面のボトムアップ・トップダウン情報処理過程理論にもとづくMEGを用いた測定が望まれる。

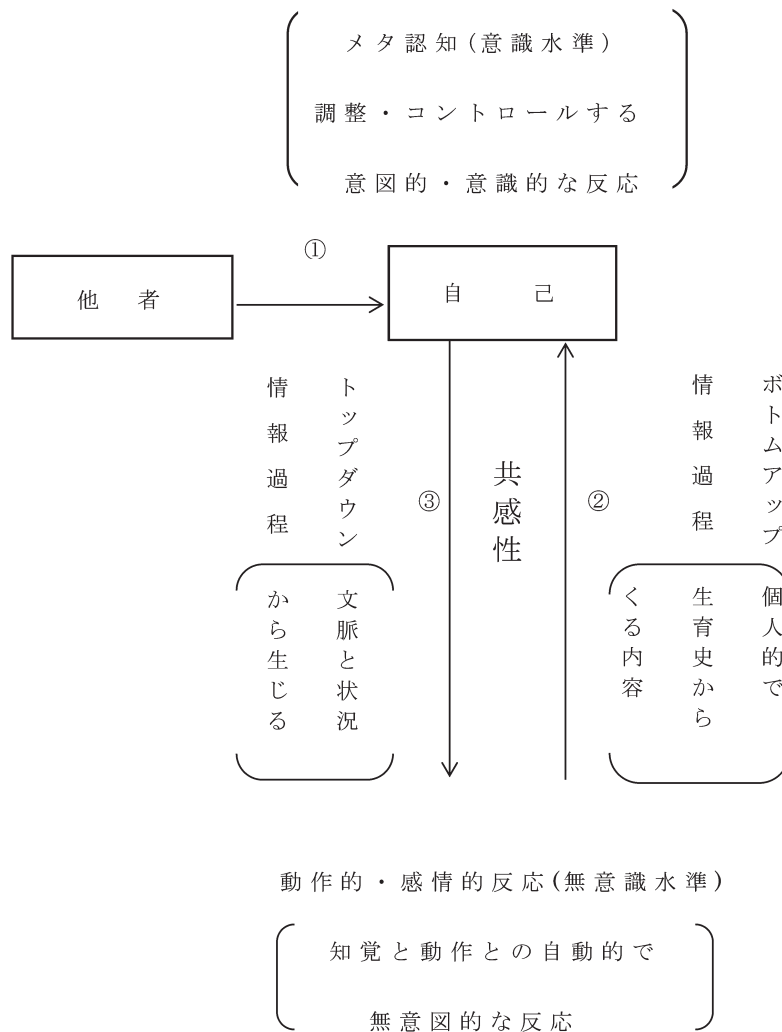


図3 ボトムアップ・トップダウン情報処理過程理論 (Decety & Meyer, 2008)

6. むすび

本稿において、心理学の5分野における共感性に関するわが国と欧米との研究結果の比較から文化差がとらえられたため、わが国で日常よく用いられている“思いやり”という語のもつ意味の特徴についてを明らかにした。

まず、共感性についての定義の歴史の変遷、諸外国の共感性という語にふくまれる意味、及び各種心理療法で重視する共感性の深さについてまとめた結果、共感性の定義の多義性や無意識水準から意識水準まで共感性として取り扱う水準があることが明らかになった。

このことを参考にして日本語の“思いやり”という語の語源やこの語の現代の定義までの歴史の変遷をまとめたところ、“思いやり”という語には、他者の(1)感情的側面について、(2)早く、(3)しかも深く、非言語的交流もふくめて、(4)察することの4つの特徴が明らかにされた。

この4点の特徴の妥当性について、今後は、異文化研究として質問紙法による検討やボトムアップ・トップダウン情報処理過程理論にもとづくMEGを用いた研究を行っていくことを提案した。

わが国では、心理学的に重要な共感性の研究は少なく、本稿が少しでも広い心理学の研究に活かされていくことを願ってやまない。

脚注

1) 心理学において「感情」という語は、感情 (feeling)、情緒 (affection)、情動 (emotion) など様々な意味をもち、様々な用語が用いられているが、本稿では、これらすべてをふくんだものとして「感情」という語を用いることにした。

本稿は、心理学の著名な学会誌に投稿し、受稿されたものの、2年間、何の連絡もなかったため、伝統ある本誌に投稿した。

文献

- 足立明久 (1993). 日本人の人間関係の特徴 (1) 京都教育大学紀要, 83, 53-65.
- Arsenio, W. F. & Lemerise, E. A. (2001). Varieties of childhood bullying. *Social Development, 10*, 59-73.
- Barron-Cohen, S. & Wheelwright, S. (2004). The empathy quotient. *Journal of Autism Developmental Disorders, 34*, 163-175.
- Batson, C. D., Early, S., & Salvarani, G. (1997). Perspective taking. *Personality and Social Psychology Bulletin, 23*, 751-758.
- Barrett-Lennard, G. T. (1962). Dimensions of therapist response as casual factors in therapeutic change. *Psychological Monograph, 76*, 1-36.
- Beck, A. T. (1963). Thinking and depression. *Archives of General Psychiatry, 9*, 324-333.
- Beck, A. T. (1970). Cognitive therapy. *Behavior therapy, 1*, 184-200.
- Bion, W. R. (1959). Attack on linking. *International Journal of Psychoanalysis, 40*, 308-315.
- Blair, R. J. R. (2005). Responding to the emotions of others. *Consciousness and Cognition, 14*, 698-718.
- Chessik, R. D. (1992). *What constitutes the patient in psychotherapy*. Northvale: Jason Aronson.
- Crick, N. R. & Grotpeter, J. K. (1995). Relational aggression, gender, & social-psychological adjustment. *Child Development, 66*, 710-722.
- Dadds, M. R., Allen, J. L., Oliver, B. R., Faulkner, N., Legge, K., Moul, C., Woolgar, M., & Scott, S. (2012). Love, eye contact and the developmental origins of empathy v. psychopathy. *The British Journal of Psychiatry, 200*, 191-196.
- Danziger, N., Faillenot, I., & Peyron, R. (2009). Can we share a pain we never felt? *Neuron, 61*, 203-212.
- Darwin, C. (1872). *The expression of the emotions in man and animal*. London; John Murray Editions.
- Davis, M. H. (1983). Measuring individual differences in empathy. *Journal of Personality and Social Psychology, 44*, 113-126.
- Davis, M. H. (1994). *Empathy*. Madison; Brown and Benchmark Publishers. 菊池章夫 (訳) (1999) 共感の社会心理学 川島書店.
- Decety, J. & Jackson, P. (2004). The functional architecture of human empathy. *Behavioral and Cognitive Neuroscience Reviews, 3*, 71-100.
- Decety, J. & Meyer, M. (2008). From emotion resonance to empathic understanding. *Development and Psychopathology, 20*, 1053-1080.
- Decety, J. (2012). *Empathy*. Cambridge; MIT Press.
- 土居健郎 (1971) 甘えの構造 弘文堂.
- 土居健郎 (1992) 新訂 方法としての面接 医学書院.
- Dymond, R. F. (1949). A scale for the measurement of empathy. *Journal of Consulting Psychology, 14*, 123-127.
- Eysenck, H. J. (1960). *Behavior therapy and the neurosis*. New York; Pergamon. 異常行動研究会 (訳)

- (1965) 行動療法と神経症 誠信書房.
- Feshbach, N. D. & Feshbach, S. (1969). The relationship between empathy and aggression in two age groups. *Developmental Psychology, 1*, 102-107.
- Fonagy, P., Steele, M., Steele, H., & Target, M. (1997). *Reflective functioning manual. Version 4. 1*. London; University College London.
- Freud, S. (1904). *Die Freudsche Psychoanalytische Methode*. Wien; Fischer Verlag. 小此木啓吾 (訳) (1969) フロイド選集15 日本教文社.
- Freud, S. (1921). *Massenpsychologie und Ich Analyse*. Wien; Fischer Verlag. 小此木啓吾 (訳) (1970) フロイト著作集6 人文書院.
- 学研編集部 (2012) ネーミング辞典 学研出版.
- Halifax, J. (2012). A heuristic model of enactive compassion. *Current Opinion in Supportive and Palliative Care, 6*, 228-235.
- 畠山美穂・畠山寛 (2012) 関係性攻撃幼児の共感性と道徳的判断, 社会的情報処理過程の発達研究 発達心理学研究, 23, 1-11.
- Hayes, S. C., Barnes-Holmes, D., & Roche, B. (2001). *Relational frame theory*. New York; Plenum.
- Hemmerdinger, J. M., Stoddart, S., & Lilford, R. J. (2007). A systematic review of test of empathy in medicine. *BMC Medical Education, 7*, 1-8.
- Hoffman, M. L. (1963). Parent discipline and the child's consideration for others. *Child Development, 34*, 573-588.
- Hoffman, M. L. (1975). Developmental synthesis of affect and cognition and its implications for altruistic motivation. *Developmental Psychology, 11*, 607-622.
- Hojat, M. et al. (2001). The Jefferson scale of physician empathy. *Educational Psychological Measurement, 61*, 349-365.
- 磯部美良・佐藤正二 (2003) 幼児の関係性攻撃と社会的スキル 教育心理学研究, 51, 13-21.
- Jung, C. G. (1921). *Psychologische typen*. Zürich; Rascher Verlag. 林道義 (訳) (1987) タイプ論 みすず書房.
- 角田豊 (1994) 共感経験尺度改訂版の作成と共感性の類型化の試み 教育心理学研究, 42, 193-200.
- 角田豊 (1998) 共感性と自己愛傾向の関連 心理臨床学研究, 16, 129-137.
- 唐澤真弓 (2015) 「思いやり」のパラドックス 心理学ワールド, 76, 17-20.
- Kathy, A., Stepien, B. S., & Amy, B. (2006). Education for empathy. *Journal of General International Medicine, 21*, 524-530.
- 勝間理沙・山崎勝之 (2008) 児童における3タイプの攻撃性が共感に及ぼす影響 心理学研究, 79, 325-332.
- 風間みどり・平林秀美・唐澤真弓・Tardif, T., & Olson, S. (2013). 日本の母親のあいまいな養育態度と4歳の子どもの他者理解 発達心理学研究, 24, 126-138.
- 河合隼雄 (1992) 心理療法序説 岩波書店.
- Keltner, D. & Shiota, M. N. (2003). New displays and new emotions. *Emotion, 3*, 86-91.
- 菊池章夫 (1984) ふれあいと思いやりの心理 川島書店.
- Kitayama, S. & Markus, H. R. (1999). Yin and yang of the Japanese self. In D. Cervone & Y. Shoda (Eds.). *The coherence of personality*. (pp.242-302) New York; Guilford.
- 金田一京助 (編) (1972) おもいやり 日本国語大辞典 (pp.1412) 小学館.
- 金田一春彦・林大・柴田武 (編) (1988) おもいやり 日本百科大辞典 (pp.42) 大修館.
- 小島義郎・竹林滋・中尾啓介 (編) (1984) 思いやり ライトハウス和英辞典 (pp.185) 研究社.
- Kohut, H. (1977). *The restoration of the self*. New York; International Universities Press. 本城秀次・笠原嘉

- (監訳) (1995) 自己の修復 みすず書房.
- 栗山容子・大井直子 (2012) 日本人大学生の価値意識 発達心理学研究, 23, 158-169.
- Lebra, T. (1976). *Japanese patterns of behavior*. Honolulu; University of Hawaii Press.
- Lipps, T. (1899). *Die ethischen Grundfragen*. Wien; Leopold VoB. 島田四郎 (訳) (1916) 倫理学の根本問題 玉川大学出版部.
- Markus, H. & Kitayama, S. (1991). Culture and the self implications for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review*, 98, 224-253.
- 増井金典 (編) (2010) 思いやり 日本語源広辞典 (pp.173) ミネルヴァ書房.
- Mathiasen, H. (2006). Empathy and sympathy. *American Journal of Cardiology*, 97, 1789-1790.
- Meeks, T. W. & Jeste, D. V. (2009). Neurobiology of wisdom? *Archives of General Psychiatry*, 66, 355-365.
- Mehrabian, A. & Epstein, N. (1972). A measure of emotional empathy. *Journal of Personality*, 40, 525-543.
- 三苫浩輔 (1976) 宇津保物語の研究 桜楓社.
- 箕浦康子 (1984) 子どもの異文化体験 思索社.
- 長尾博 (2013) ヴィジュアル精神分析ガイダンス 創元社.
- 長尾博 (2014) “思いやり” と共感性に関する調査 未公開.
- Nakagawa, K. M., Teti, D. M., & Lamb, M. E. (1992). An ecological study of child-mother attachments among Japanese sojourners in the United States. *Developmental Psychology*, 28, 584-592.
- 新村出 (編) (1955) 思い遣り 広辞苑 (pp.387) 岩波書店.
- 西津弘美 (訳) (2004) 現代語で読む歴史文学 義経記 勉誠出版.
- 大石史博 (1989) ナルシシズム的人格に関する研究 (4) 日本心理学会第53回大会発表論文集, 155.
- Olnick, S. L. (1984). A critique of empathy and sympathy. In J. Lichtenberg., M. Bornstein., & D. Silver (Eds.). *Empathy I* (pp.137-166). Hillsdale; Analytic Press.
- 大野晋 (1974) 日本語をさかのぼる 岩波書店.
- Premack, D. & Woodruff, G. (1978). Does the chimpanzee have a theory of mind? *Behavioral and Brain Science*, 1, 512-526.
- Reid, C., Davis, H., Horlin, C., Anderson, M., Baughman, N., & Campbell, C. (2013). The kids' empathic development scale. *British Journal of Developmental Psychology*, 31, 231-256.
- Rogers, C. R. (1957). The necessary and sufficient conditions of therapeutic personality change. *Journal of Consulting Psychology*, 21, 96-102.
- Rosenblum, L. D. (2010). *See what I am saying*. New York; W. W. Norton. 斎藤慎子 (訳) (2011) 最新脳科学でわかった五感の驚異 講談社.
- 阪倉篤義 (1978) 日本語の語源 講談社現代新書.
- 櫻井茂男 (1988) 大学生における共感と援助行動との関係 奈良教育大学紀要, 37, 149-153.
- 佐藤球 (1927) 大鏡詳解全 明治書院
- Singelis, T. M. (1994). The measurement of independent and interdependent self-construals. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 20, 580-591.
- 下山晴彦 (1993) 心理療法過程における関係性の研究 心理臨床学研究, 10, 4-16.
- Smith, A. (1759). *The theory of moral sentiments*. Printed for A. Millar et al. in Edinburgh. 水田洋 (訳) (1973) 道徳感情論 筑摩書房.
- Stern, D. N. (1985). *Interpersonal world of the infant*. New York; Basic Books. 小此木啓吾他 (訳) (1991) 乳幼児の対人世界 岩崎学術出版.
- Stotland, E. (1969). Exploratory investigation of empathy. In L. Berkowitz. (Ed.). *Advance in experimental social psychology*. Vol. 4. (pp.271-314). New York; Academic Press.

- 鈴木有美・木野和代（2008）多次元共感性尺度の作成 教育心理学研究, 56, 487-497.
- 鈴木孝夫（1973）ことばと文化 岩波新書.
- 田中伸明（2006）共感的理解の伝達を意図するカウンセラーの応答の特徴について カウンセリング研究, 39, 113-122.
- 竹内整一（1997）日本人は「やさしい」のか ちくま新書.
- 鑪幹八郎（1985）精神分析・カウンセリングにおける思いやり 教育と医学, 33, 295-301.
- Tobin, J., et al. (1989). *Preschool in three cultures*. New Haven; Yale University Press.
- Tran, U. et al. (2013). Factorial structure and convergent and discriminant validity of the empathy scale. *Psychological Reports, 113*, 441-463.
- Travis, C. (1998). Omoiyari as a core Japanese value. In A. Angeliki & T. Elzbieta. (Eds.). *Speaking of emotions*. (pp.55-81). Berlin; Mouton de Gruyter.
- 海野泰男（1996）今鏡全釈上・下 パルトス社.
- 内田由起子・北山忍（2001）思いやり尺度の作成と妥当性の検討 心理学研究, 72, 275-282.
- Ward, J. (2012). *The student's guide to social neuroscience*. Hove, East Sussex; Psychology Press.
- Watson, P. J., Grisham, S. O., Trotter, M. V., & Biderman, M. D. (1984). Narcissism and empathy. *Journal of Personality Assessment, 48*, 301-305.
- Wellman, H.M. et al. (2001). Meta-analysis of theory of mind development, *Child Development, 72*, 655-684.
- 山上敏子（1984）治療者患者関係 山上敏子（1990）行動療法 (pp.182-197) 岩崎学術出版.
- Yogo, M. & Onoue, K. (1998). The social sharing of emotion among Japanese students. *Proceedings of the Xth conference of the international society for research on emotions*. (pp.335-340). Amsterdam; Amsterdam University.
- Zaki, J., Weber, J., Bolger, N., & Ochsner, K. (2009). The neural bases of empathy accuracy. *Proceeding of the National Academy of Sciences of the United States of America, 106*, 11382-11387.